

〔論文〕

## 中級「漢字・語彙」クラスにおける自律学習の実践

—日本語コースデザインの改善を通して—

國澤里美・梶原彩子

名古屋学院大学留学生別科

### 要 旨

名古屋学院大学留学生別科では、2016年度春学期から中級レベルの漢字・語彙クラスを新設した。これは、学習者の初級から中級への移行に際して、特に漢字・語彙面で課題が挙げられてきたことに起因する。秋学期には、学習者自らが自身のニーズを意識化し、必要な漢字・語彙について自律的に学習していくという取り組みを行った。具体的には、①学習者自身が進度や学習範囲を決めて行う漢字学習、②課題遂行型の漢字・語彙学習の実施である。計画の立案・実施・振り返りのために、「学習計画・振り返りシート」「漢字学習の振り返りシート」「自己評価シート」を用いた。また、学習者自身の学習プロセスの意識化および可視化のためにポートフォリオ作成も行った。本稿では、この漢字・語彙における自律学習の実践を報告し、そこから見えた成果と課題について述べた。

キーワード：自律学習、漢字学習、課題遂行型学習、ポートフォリオ、中級クラス

## Implementation of Autonomous Learning in Intermediate “Kanji/Vocabulary” Class: Improvement of Japanese Course Design

Satomi KUNISAWA, Ayako KAJIWARA

Institute for Japanese Studies,  
Nagoya Gakuin University

## 1. はじめに

名古屋学院大学留学生別科（以下、別科）では日本語コースの見直しを行う中で、2016年度から中級の漢字・語彙クラスを新設した。これは、初級から中級へのスムーズな移行が上手くいかない要因として、漢字・語彙知識の不足が教員から指摘されており、その課題解消を狙ったことである。しかし、春学期には、一斉授業では多様なニーズや背景を持った学習者に対応しきれないという点が課題として挙げられた。また、授業時間内の取り組みだけでは学習成果が上がりやすく、授業時間外での学習者自身の能動的な学習が求められるという指摘もあった。これを受けて、秋学期には次の2つの要素を取り入れた。1つ目は、学習者自身が進度や学習範囲を決めて行う「漢字学習」である。これは、該当レベルの学習者に身につけてほしい項目・内容・数というコースの到達目標がベースになった取り組みである。コースとしての基準を満たした上で、学習範囲や進度には自由度を持たせ、学習の管理は学習者自身が行う。2つ目は、自身が必要な漢字・語彙を自律的に学習していく「課題遂行型」の取り組みである。これは、学習者自身が漢字・語彙のニーズを意識化し、漢字・語彙学習の動機づけ強化を狙ったものである。本実践では、1つのクラスの中で「漢字学習」と「課題遂行型学習」の2つを組み合わせることにより、コースの到達目標と学習者のニーズの両方を満たすことを狙った。この2つの活動において「学習計画・振り返りシート」「漢字学習の振り返りシート」「自己評価シート」を用いて計画の立案・実施・振り返りを行った。また、学習者自身の学習プロセスの意識化および可視化を狙い、ポートフォリオ作成も行った。本稿では、漢字・語彙クラスにおける自律学習の実践を報告し、そこから見えた成果と課題について述べる。

## 2. 中級「漢字・語彙」クラスを設けた経緯

### 2.1 別科の概要

まず、別科の概要を述べる。別科は海外協定校からの交換留学生と私費留学生の受け入れを行っている。このうち、交換留学生が占める割合が大きく、出身はアメリカ、カナダ、中国、台湾、韓国、タイ、フィリピンなどである。在籍期間は1学期から最長1年であり、交換留学生は修了後、ほぼ全員が帰国する。一方、少数ではあるが私費留学生も在籍している。私費留学生のコース修了後の進路希望は様々であり、帰国する者もいれば、日本国内の大学や大学院への進学を希望する者、日本国内や母国の日系企業への就職を希望する者もいる。このように、別科は、交換留学生を主体としたコースではあるものの、進学・就職希望の私費留学生も一定数在籍しており、学習者の背景やニーズは多様である。

また、学習者のレベルも様々であり、ひらがなから始める初級の学習者から、日本語能力試験N1を取得している上級の学習者までいる。レベルの異なる学習者に対応できるように、別科では日本語I～Vのクラスを開講しており、4月（春学期）と9月（秋学期）の学期直前の日本語診断テストの結果によってクラス分けがなされる。

クラスの運営方法は、初級と中級以上とで異なる。日本語Ⅰ・Ⅱ（初級）は、初級の日本語教育でよく用いられるチームティーチング体制を取っている。学期を通して同じテキストを複数の教師と学習し、学習者ができることを少しずつ増やすことを目指してシラバス・カリキュラムが組まれている。一方、中級以上では学習者ができることが広がり、より大きなタスクの遂行や、技能別の活動が可能となる。このため、日本語Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ（中級～上級）は科目別にクラスが運営されている。本稿では、日本語Ⅲ（中級）の漢字・語彙クラスについて述べる。

## 2.2 中級クラスの概要と問題点

別科では、近年の外国語教育の流れや学生の実態に即したコースの見直しを行っており、2015年度には初級クラスにおいて、言語運用を重視したコースデザインを行った<sup>1)</sup>。同年、さらに中級から上級クラスの科目についても再検討した。その結果、中級の漢字・語彙について、教員から次のような点が課題として挙げられた。

- ・初級には漢字に特化した授業時間が設けられているが、中級以上にはない。
- ・初級に比べて中級以上では、学習者間の漢字・語彙知識に大きな差が見られる。
- ・言語運用に重点を置いたクラスの中で、漢字・語彙知識の不足によって言いたいことが表現できないなど、クラス活動が制限される学習者がいる。

これまでも、漢字・語彙知識のばらつきによるタスク達成度の個人差が課題として挙げられたことがあった。しかし、授業内での個別対応は難しく、また、特に授業外での取り組みが必要だと思われる学習者に対して、漢字・語彙の自主学習を促しても、「必要性は自覚しているが、どのように学習を進めたらいいのかわからない」「一人では学習のモチベーションを維持することが難しく、継続的な学習になりにくい」などを理由に、自身で学習を進める学習者は少なかった。そこで、初級から中級へのスムーズな移行を狙って、2016年度から新たに中級の「漢字・語彙」クラスを週1コマ（90分）設けることにした<sup>2)</sup>。

2016年度春学期末に実施した授業アンケート<sup>3)</sup>の結果、日本語Ⅲの「漢字・語彙の授業は適当であったか」という設問に対し、有効回答10名のうち、「どちらかと言えば『はい』」を選んだ

---

1) 2015年度から運用している「初級日本語クラスのコースデザイン」については國澤・近藤(2016)で述べた。

2) 日本語Ⅲは週8コマ（1コマ90分）である。2016年度から科目を次のように変更した。（ ）は週あたりのコマ数を表す。

2015年度まで：会話（2）、聴解（1）、作文（1）、文法・読解（4）

2016年度から：話すa, b（2）、聞く（1）、書く（1）、読む（1）、文法（2）、漢字・語彙（1）

3) 調査時期は2016年7月7日から7日13日で、回答は無記名とした。各項目について「そう思う」「どちらかと言えば『はい』」「どちらとも言えない」「どちらかと言えば『はい』」「そう思う」の5件法（5段階評価）で回答を求め、さらに各項目の下にコメント欄を設けて自由記述式回答も得た。質問紙は日本語版と英語版を作成し、回答は日本語でも英語でも可とした。日本語Ⅲの受講者は13名であった。

のは8名、「どちらとも言えない」を選んだのは2名であった。また、自由記述欄には「漢字の能力がのびて、とてもよかったです。」「In kanji class, we learn the vocabulary map, it's helpful for us to remember words because those words are closely related.」といったコメントがあった。このように、概ね好意的な評価を受けたものの、次の点が教員側から課題として挙げられた。

- ・学習者によって興味の対象、必要な語彙、到達目標（理解語彙を増やすことを目指すのか、使用語彙を増やすことを目指すのか）が異なるため、学習者の多様なニーズに対応することが難しい。
- ・学習者間の知識の差が大きく、クラスで難易度を合わせることが難しい。
- ・週1コマ（90分）という授業時間内の学習だけでは効果が上がりにくい。
- ・扱うべき漢字のレベルや範囲に課題が残る。授業で扱える漢字や語彙は限られているため、例えば「学校場面で特に使われる漢字」というように、学習する漢字の選定が必要である。

このように、多様なニーズや背景を持った学習者への対応、授業時間外の学習時間の確保、扱うべき漢字のレベルや範囲の選定などが課題として挙げられた。加えて、学期直前の日本語診断テストの結果次第で、漢字圏学習者と非漢字圏学習者が混在するクラスになる場合もあれば、どちらかに片寄ったクラスになる場合もあるため、多様な学習者に対応できるクラスデザインが望ましいという意見が挙げられた。

これらの課題を踏まえて、別科における中級「漢字・語彙クラス」では、学習者自らが自身のニーズを意識化し、必要な漢字・語彙について計画を立てて学習を進める「自律学習」の要素を取り込むことが望ましいと考えた。

## 2.3 自律学習

田中・斎藤（1993）は、学習者の自律的学習能力について、「実際の学習を進めるなかで自らの学習のいろいろな側面について意識化を行う必要がある」とし、「コースが展開するなかで学習者自身が自らのニーズやレディネスについて認識を深めるにつれて、コースデザインは随時改善していかなければならない」と述べている。梅田（2005）は、自律学習は「『一人で学習すること』ではないし、自らの学習を『一人で選び、決め、一人で計画すること』でもない」とし、むしろ「他者の援助を得たり、周りの物を利用したりする」力が重要であると述べている。また、この自律学習を促進させるための手段として、日本語教育でもポートフォリオ利用が提案されている（横溝2000など）。

これらを踏まえて、本実践では教室内だけでなく教室外でも漢字・語彙学習に取り組んでいけるようなクラスデザインとして、学習者が自ら学習の管理を行う「漢字学習」と、「課題遂行型学習」という自律性を重視した2つの活動を取り入れる。具体的には、学習者自身が進度や学習範囲を決めて「漢字学習」を進め、それを振り返るという活動である。また、学習者の興味やニーズを取り入れたコースデザインが望ましいと考え、学習者が自ら課題を選び、計画し、それを振り返るという「課題遂行型」の活動を繰り返し行う。この2つの活動において、内省活動に加え、ク

クラスメイトや教師からのフィードバックの機会を積極的に取り入れる。加えて、内省活動を促進させるために学期を通してポートフォリオを作成し、自身の学習の取り組みおよびその過程について発表する活動も行うことにした。次に2016年度秋学期の中級「漢字・語彙」クラスの具体的な取り組みについて述べる。

### 3. 実践の概要

#### 3.1 目的

初級修了者が中級に移行する際に、漢字・語彙の知識が足りなかったり、知識があったとしても、それをどのように使ったらいいのかわからなかったりして、伝えたいことを上手く表現できないという場面がある。初級から中級への橋渡しとして、言語知識を増やし、それを現実場面で使えるように言語運用能力を伸ばすことが必要となる。

本実践は、次の3つを主な目的とする。

- 1) コースの目標として設定した1週40字以上の漢字・語彙を身につける。
- 2) 学習者それぞれの興味やニーズに沿って漢字・語彙知識を増やす<sup>4)</sup>。
- 3) コース修了後も継続して日本語学習が進められるように、自律学習能力を高める。

そのために、コースとしての基準を満たした上で学習者自身が進度や学習範囲を決めて行う「漢字学習」と、興味やニーズによって自身の課題を設定する「課題遂行型学習」の2つの要素を取り入れた。それぞれについて3.2節および3.3節で詳述するが、どちらも学習者自らが目標・計画を立て、実行し、振り返り、修正するという点に特徴がある。目標設定と計画立案後の活動は教室外で進め、教室ではクラスメイトに学習方法や目標達成度を報告し、授業時間で振り返りを共有する時間を持つというように、教室の中と外をつなげたクラスデザインになっている。

#### 3.2 クラスの概要と学習の流れ

授業実施期間は2016年9月～2016年12月である。日本語Ⅲは12名で（漢字圏学習者7名：うち韓国人学習者1名、非漢字圏学習者5名）で、コース開始時の日本語レベルは初級修了から日本語能力試験N2合格程度である。協定校からの交換留学生10名、私費留学生2名（うち1名は社会人経験者）で、コース修了後の進路希望は、帰国10名、進学1名、就職1名である。

漢字・語彙クラスの主な活動は、A) クラス活動<sup>5)</sup>、B) 漢字学習、C) 課題遂行型学習、D) ポートフォリオ作成である。本稿の考察対象であるB)～D)は、授業時間に目標・計画を立て、教

4) 漢字・語彙の理解を目指すのか、使用を目指すのかという目標設定は学習者の判断に委ねた。

5) 授業時には、多義語・慣用句・コロケーションなどの紹介と練習、語彙ネットワーク構築のための語彙マップ作成などを行った。

室外で実施し、授業時間にその経過を確認・報告する形を取った。学習の過程や成果を記録し、学習者自身が自分の達成度やニーズを意識化・可視化するために「学習計画・振り返りシート」「漢字学習の振り返りシート」「自己評価シート」を導入・利用し、ポートフォリオを作成した。学習の流れの例を図1に示す。漢字学習は、順に、①目標設定・学習計画立案→②漢字学習→③漢字クイズ実施・採点・記録の記入→④クラスメイトとの共有→⑤教師からのコメントである。課題遂行型学習は、①目標設定・学習計画立案→②活動→③活動の振り返り・記録の記入→④クラスメイトとの共有→⑤教師からのコメントの順である。

### 3.3 漢字学習の実践

2.2節で述べたように、様々な背景やニーズを持った学習者がいるという現状に加え、中級以上の継続的な学習のためには、学習者自身が漢字学習のストラテジーを試行錯誤する過程を経験することが望ましいと考える。そこで、授業外での漢字学習を促した。授業時間には、学習者自身が学習の開始箇所や範囲を決めるといった学習計画の立案、クイズの実施・採点・フィードバックを行う。具体的には次のような流れである。

#### ①目標設定・学習計画立案【教室内】

『日本語学習のためのよく使う順漢字2200』を用い、第1週と最終週を除き、毎週クイズを実施した。学習者自身が学習開始箇所と進度を決め<sup>6)</sup>、「漢字学習の振り返りシート」に計画を記入

時間 (90分)	漢字学習				課題遂行型学習				クラス活動	その他
	20分				15分				55分	
教室内	③漢字クイズ実施・採点・記録の記入	④クラスメイトとの共有	⑤教師からのコメント	①目標設定・学習計画立案	③活動・記録の振り返り	④クラスメイトとの共有	⑤教師からのコメント	①目標設定・学習計画立案	注5参照	
教室外	②漢字学習			⑤教師からのコメント	②活動	③活動の振り返り・記録の記入		⑤教師からのコメント	(宿題)	ポートフォリオ作成

図1 学習の流れの例 (第5回授業)

6) 目安として1週40字を提示したが、難しい場合は知らせるように伝えた。今回の実践では、すべての学習者が1週40字、あるいは80字のペースで学習を進めた。

する。

## ②漢字学習【教室外】

テキストの1番目～800番目の漢字は「読み」「書き」両方のクイズ、800番目～2200番目の漢字は「読み」だけのクイズとした。このテキストはよく使う順に提示されており、1番目の漢字は「日」、2番目は「一」となっている。使用頻度が高いものは「読み」「書き」どちらもできることが望ましい。しかし、パソコンや携帯電話の普及により、「読むこと」ができれば日常生活に支障をきたすことが少ないレベルの漢字もあると思われる。そこで本実践では、非漢字圏学習者の負担も考慮に入れ、その基準を800番目に設定し、801番目以降のクイズは「読み」に限定した<sup>7)</sup>。ただし、これは授業外の学習を制限するものではなく「読み」だけ学習するか、「読み」「書き」どちらも学習するかの判断は学習者に委ねた。

## ③漢字クイズ実施・採点・記録の記入【教室内】

毎週、授業の最初の20分程度をクイズの実施、自己採点、「漢字の振り返りシート」記入、クラスメイトとの共有、次週の学習計画の記入に当てる。シートは、学習記録が一目で分かるようにA3判1枚になるようにし、記入するたびに自身の学習過程を振り返れるようにしている。

## ④クラスメイトとの共有【教室内】

自身の振り返りをもとに、クラスメイトと情報を共有する。学習の成果や課題、学習の時間や場所、ストラテジー、自宅学習で困っていることなど、自由に話してもらおう。

## ⑤教師からのコメント【教室内外】

クラスでの共有の時間に教師がコメントする場合もあるが、限られた授業時間に1人1人コメントすることは難しい。自身のコメント、クラスメイトからのコメント、次週の学習計画を記入した「漢字の振り返りシート」を提出してもらい、そこに教師からのコメントを入れる。また、毎週の漢字クイズの答案用紙も同時に提出してもらい、自己採点で気づけなかった点などをフィードバックしている。

### 3.4 課題遂行型学習の実践

課題遂行型学習では、達成したい課題を学習者自身が考え、その目標を達成するためには具体的にどのようなことをする必要があるのか、自分で計画を立てて実行する。学習者自身が目標設定や学習計画に関わることが学習の動機づけになり、活動への主体的な取り組み、モチベーションの維持・向上にもつながると考える。しかし、これまで教師の指示に従って受け身で学習を進

---

7) これまで中級後半レベルに漢字圏学習者が多く在籍する傾向があり、801番目以降を選択する漢字圏学習者にとって「読み」に課題があることも要因の1つである。

めることに慣れている学習者にとっては、自身で学習課題を決めることは簡単なことではない。自身の学習について意識化できていなかったり、課題が見つからなかったりすることも十分考えられる。そこで、初回と2回目の授業で、これまでの学習ストラテジーについて話し合ったり、クラス活動や漢字クイズをやってみたりして内省の活性化をはかる。3回目の授業で、課題遂行型学習の目標を設定してもらおう。各自、毎週の計画を立て、その振り返りを自分で行う。その際に、途中で目標や計画を修正してもかまわないことを伝えた。授業でも経過報告の時間を設け、クラスメイトと共有する。この一連の活動の経過をポートフォリオに保存していき、学期末に「自分の漢字・語彙学習について」というテーマで各自の学習経験（取り組みやその過程）について発表する機会を設けた。発表については3.5節で述べる。

### ①目標設定・学習計画立案【教室内】

学習者が自身の興味やニーズを意識化し、各自が学期終了時までに達成したい目標・課題を決める。学習者の中には、帰国後やその先の将来を見据えた長期的な目標を立ててから、その目標達成のための短期的な目標を設定した者もいた。その課題を達成するために学期ごと、1週ごとの具体的な計画を「学習計画・振り返りシート」に記入する。目標や計画は修正・変更可とする。2016年度秋学期に学習者が立案した目標には次のようなものがある。（一部抜粋，原文ママ。以下、同様。）

- ・私は漢字を読めないのでできるだけ読めるようになりたいです。（学習者A）
- ・「(映画のタイトル)」をりかいする。この中にあることばを勉強する。（学習者B）
- ・道に漢字を読みたい（駅や店に）。（学習者C）
- ・日常生活についての単語を覚える。（学習者D）
- ・Kポップにかんけいあることば、あとはざっしで使われていることばをしりたいです。（学習者E）
- ・生活に関する物事を覚えられるように。スーパーやアルバイト先で見たり聞いたりする言葉や表現を覚える。（学習者F）

### ②活動【教室外】

学習者は自ら設定した①の目標を達成するために、必要な活動を教室外で行う。具体的には、以下のような取り組みを行った。

- ・本とかマンガとか小説とか出て来るかんじをメモをとっておぼえるようになるまでよみ、くりかえします。（学習者A）
- ・毎日10分ずつ見る。毎日10分ずつ見ながら知らないごいを書いておく。（学習者B）
- ・道の漢字を写真にとる。後で意味とよみをさがして書きます。（学習者C）
- ・生活についての商品が気になります。わからない単語をメモにします。次の中国人留学生



に向けた良い「(スーパーの名前)」のガイドパンフレットを作る。(学習者D)

- ざっしを読んで、毎週分からないことばを一つ以上えらぶ。じしょでさがします。わからないことば全部使えるようになりたいです。れい文を作ります。(学習者E)
- ある物を使うとき、その物の名前を知らなかったら、すぐ書きます。もし今回まだ思い出さないと、もう一度書きます。(学習者F)

### ③活動の振り返り・記録の記入【教室内外】

各自、毎週の計画を立て、その振り返りを行う。シートは、学習記録が一目で分かるようにA3判1枚に収め、自身の学習過程を随時振り返ることができるようにしてある。

### ④クラスメイトとの共有【教室内】

自身の振り返りをもとに、クラスメイトと情報を共有する。学習の経過報告、問題点など、自由に話してもらう。

### ⑤教師からのコメント【教室内外】

自身のコメント、クラスメイトからのコメント、次週の活動計画を記入した「学習の計画・振り返りシート」を提出してもらい、そこに教師からのコメントを入れる。クラスでの共有の時間に口頭でコメントする場合もある。

## 3.5 発表およびポートフォリオ

学習者自身の学習過程の意識化・可視化を促す機会として、学期の最後に発表の時間を設けた。また、学期を通してポートフォリオを作成し、最後にそれを整理し、振り返る時間を設け、提出する。

### 3.5.1 発表

授業最終日にクラスメイトに自分の学習過程を発表することで、自身の学習の取り組みやその過程を振り返る。発表は「自分の漢字・語彙学習について」というテーマで、課題遂行型学習の要素を含めることを必須とし、これに漢字学習など他の要素を加えても良いとした。

発表は質疑応答時間を含めて1人15分程度とし、スライドを使うか、成果物を見せるかといった発表形式は学習者に任せた。発表後にはクラスメイトからの質問・コメントを受ける時間をあることを予め伝えておくことで、聞き手を意識した発表になるよう促した。

### 3.5.2 ポートフォリオ

本実践では、「学習成果の評価ツール（国際交流基金2010）」として、学期を通じてポートフォリオを利用した。国際交流基金（2010）は、ポートフォリオの構成要素として①「評価表」②「言語的・文化的体験の記録」③「学習の成果」を挙げている。本実践では、①に相当するものとして「自

己評価シート」,②に相当するものとして「漢字学習の振り返りシート」,「学習計画・振り返りシート」,③に相当するものとしてそれぞれの目標に沿って学習者自身が集めた資料や成果物などを入れる。

学習者自身が評価に関わることで、学習の動機づけ強化になり、主体的な活動参加につながる事が期待される。学習者は全ての学習記録を入れた後、それらを整理し、自身が必要だと判断したものを提出する。

#### 4. 結果と考察

3.1節で述べたように、本実践の主な目的は次の3つである。

- 1) コースの目標として設定した1週40字以上の漢字・語彙を身につける。
- 2) 学習者それぞれの興味やニーズに沿って漢字・語彙知識を増やす。
- 3) コース修了後も継続して日本語学習が進められるように、自律学習能力を高める。

このために、本実践では教室活動以外に、教室外活動を含む「漢字学習」と「課題遂行型学習」を実施した。教室外での活動を教室内でクラスメイトと共有し、それぞれの学習過程と成果をシートに記入した。コースの最後には自身の学習について「発表」し、自己評価と合わせて「ポートフォリオ」を提出した。以下、上記3つの目的について、漢字学習、課題遂行型学習、発表、ポートフォリオに見られた気づきや変化について見る。

##### 4.1 漢字学習について

漢字学習の振り返りシートには、学習範囲、クイズの結果（正答数/問題数）、コメントを記入する欄を設けてある。学習者全体に共通する傾向として、クイズの点数や結果についてのコメントが多く見られるが、その記述内容には変化が見られる。はじめは「間違えが多い」「勉強しなかった」「むずかしい」などの記述のみに留まる学習者が多かったのに対し、徐々に「来週は100点取りたいです」「うれしかった」「これは恥ずかしい」「悔しい」といった自分の感情、「読み方が同じ漢字は特にむずかしい」「濁点と長音が苦手です」といった自らが苦手とする分野への気づき、「ほかのべんきょうの方法をさがしたい」「漢字を書く時、日本語と中国語違うところはもっと注意します」など学習方法や学習の注意点のような記述が見られるようになる。

以下は、ある学習者の振り返りシートの記録からの抜粋である。（原文ママ、下線は筆者による。以下、同様。【 】はクイズの実施回数である。）

【第2回】二ポイント増えました。やっぱり、こまかいミスが多いです。

【第4回】今回いろいろあって、あまり勉強できなかったのですが、ポイントが上がったのは、多分仕事で使う言葉のおかげです。

【第6回】あと一点だけで、目標を達成します。おいしいです！

【第7回】初めて目標を達成できた！ うれしいです～

このように、はじめは正答数を気にしている様子うかがえるが、回を追うごとに「目標を達成」という記述や「仕事で使う言葉のおかげ」などクイズの結果とその出来の原因についての自己分析がなされている。

この学習者は、漢字学習全体の振り返りで次のようにコメントしている。

今学期は初めて日本語の漢字・語彙を勉強しました。今までことばを増やす方法は知らなかったです。何回も書き繰り返すは一番効果的な方法だと聞きましたけど、今自分の目で確かめてみたら本当だとわかりました。点数も見たら、最初は半分もできていないのに対して、今は半分以上になったのは、やはり勉強方法によって点数に影響があります。

学期末に学習全体を振り返って、この学習者は自らの学習方法についての気づきを述べている。この学習者は独学で学んできたため、学習者間での学習方法についてのやりとりを通して他の学習者の学習方法を積極的に取り入れ、自分に合う方法を模索していた。

今回の取り組みでは、学習者全体の記述から、漢字クイズとその振り返りが「漢字学習の動機づけ強化」や「学習方法の意識化」により影響を与えていたと思われる。この2点について、以下で見ていく。

まず、1点目の「漢字学習の動機づけ強化」について見る。次のコメントから、漢字クイズとその振り返りを学習者がどのように捉えていたかがうかがえる。これらの記述から、学習者が漢字クイズを学習の意欲を高めるための手段の1つとして捉え、漢字クイズは有効であると評価している様子が読み取れる。

- ・クイズがありますから、勉強の意欲を高めます。
- ・だんだんやさしくなった！ ちょっと大変だったけど、たくさん習いました！
- ・私はけっこうなまけものだけど、この授業はほとんど毎週小テストとかしゅくだいがあるので、なんとなく自分の積極性がでてきました。とてもいいと思います。
- ・毎週「いやだな」「面倒」と思っていましたが、知らず知らずのうちに秋学期が終わります。覚えた漢字と言葉も増えてきました。さらに、ほかの授業でテキストの文や先生たちが配ったプリントで読める漢字がどんどん増えてきました。毎週の漢字の勉強は効果的だと思います。

初級と比較して中級以降の学習者は、自身の成長が見えにくいと言われる。しかし、漢字クイズは比較的、努力が目に見えやすいため、その結果に一喜一憂しながらも各自のペースで取り組んでいたと思われる。また、どの学習者も、振り返りシートで、学習者自身が「70%以下ははずかしい」「満点じゃなかった」「じゅぎょうおわるまえに、(70%)できるかもしれない」など、

回を追うごとに各自の能力に応じた「目標点」を設定し、クイズに臨む様子がうかがえた。また、「他の間違いは気に入らない（気にしない）けど、『保つ』を何度も見てまた覚えてないのに悔しい（原文ママ）」『課題』ってなんかじが書いてうれしかったです」など、個々の漢字についての目標も設定されていることが読み取れるような記述が見られた。このような記述が出てくるにつれて、授業内でも「AとBという漢字が入った言葉はこれ以外にあるか」「『変身』『変化』『変動』『変色』の例文を挙げて）主語に来る名詞はこれで合っているか」など、自ら考えて具体例を挙げ、それが合っているか教師に確認するというような能動的な質問姿勢に変わっていった。以上のことから、コースデザインの中で教師側が取り入れた漢字クイズを学習者が自分の漢字学習の動機づけとして有効利用していたと言える。

しかし、取り組みに満足しなかった学習者も1名いた。

一週間に40字は多いですね。たくさん初めて見た漢字がありました。実はその漢字をおぼえていない。もっとしぜんな習い方のほうがいいと思います。じゅぎょうで勉強したらおぼえやすい。

この学習者は初級修了段階で、負担が大きかったと思われる。「じゅぎょうで勉強したら」という記述について確認したところ、初級のように授業内で書き順、読み、書きを1字ずつ取り扱ってほしかったとのことである。今回の取り組みでは、学習者によって漢字クイズの範囲や内容が異なるため、クイズとクラス活動（注5を参照）を関連付けることはしなかった。授業時間内の振り返りではお互いの漢字学習のストラテジーや問題点を話し合う時間を設けたが、それでも1人で学習を進めることが難しい学習者への対応は今後考えていく必要がある。1回のクイズの分量については第5章で述べる。

2点目の「漢字学習の意識化」については、例えば学習方法の変化の有無、自分に合う学習ストラテジーの模索などが考えられ、次のようなコメントが寄せられた。

- ・ 前にフラッシュカードで勉強したけど、今紙一枚で勉強しているから、もっと便利になりました。
- ・ そのかんじをおぼえられるようになるまで、よみをくりかえしたり、書きも繰り返したり、しました。
- ・ 勉強のしかたは変わらない。分からない例文と新しい言葉にマーカーで線を引いて勉強したあと、二、三日後にもう一度復習する。
- ・ 漢字クイズの覚え方が変わりました。最初は読みだけでしたが、ことばを覚えなければならぬことがわかりました。
- ・ 自分が知らないことについてたくさん意見を聞くと自分で利用することができます。
- ・ 今まで漢字・語彙を勉強する方法は先生やクラスメートなど考えてもらったことをいろいろ実行してみました。

このように最初から自分の学習方法を持っている学習者はそれを継続し、自分に合う方法が確立されていない学習者は自身で試行錯誤したり、クラスメイトや教師からのコメントによって試したりした様子が見られる。「前にフラッシュカードで勉強したけど、今紙一枚で勉強している」と記述した学習者は、授業内で、「初級ではひとつの漢字についてフラッシュカードを作らなければいけない」と思っていたが、この漢字クイズの勉強をしながら、「今のレベルでは漢字が使われている『ことば』が重要だ」と思うという感想を述べている。また、「ことばをおぼえなければならぬ」という記述からは、『漢字』を学ぶ」という意識から『(漢字から成る)ことば』を学ぶ」という意識に変化していく様子も見られる。

コース修了後も学習を継続するためには、自分に合う学習スタイルやストラテジーを見つけることが必要であると考えられる。本実践では、授業外の時間を使って学習者自身が自分に合う方法を模索しながら漢字学習を進める方法を選んだ。ただし、上記の「たくさん意見を聞くと自分で利用することができます」というコメントにも見られるように、教室での情報交換や共有の時間が、内省活動の活性化につながることを期待される。クラスでの共有活動がより有効な内容になるように今後検討を重ねる必要がある。

## 4.2 課題遂行型学習について

課題遂行型学習は、それぞれの学習者が自身必要な漢字・語彙を自律的に学習していくために行った取り組みである。学習者は自らの目標を達成するために必要な活動を教室外で行った。今回、学習者が挙げた目標を再掲する。

- ・私は漢字を読めないののでできるだけ読めるようになりたいです。(学習者A)
- ・「(映画のタイトル)」をりかいする。この中にあることばを勉強する。(学習者B)
- ・道に漢字を読みたい(駅や店に)。(学習者C)
- ・日常生活についての単語を覚える。(学習者D)
- ・Kポップにかんけいあることば、あとはざっしで使われていることばをしりたいです。(学習者E)
- ・生活に関する物事を覚えられるように。スーパーやアルバイト先で見たり聞いたりする言葉や表現を覚える。(学習者F)

目標達成のための活動として、学習者Aは自分が読みたかった小説を読むことに決め、学習者Bは好きな映画を字幕なしで見て、セリフまで理解すること、学習者Eは好きなKポップの雑誌を読むことなど、自身の好きなことから目標を設定した。学習者Cは、生活の中で必要なスーパーの掲示や看板、道路標識、説明書、寮の洗濯機の漢字で書かれた設定ボタンの写真を撮って、そこに漢字の読み方と英語の意味を書き入れていくこと、学習者Dは次年度の留学生のために、よく利用するスーパーの案内図を作ること、学習者Fも自分の生活の中で必要となることを目標に

設定した。

課題遂行型学習は、学習者自身の興味やニーズによって活動がなされるため、能動的な気づきが起こりやすく、それが学習の動機づけの強化やモチベーションの維持に良い影響を与えたと思われる。この課題遂行型学習についても、次のように好意的な評価を受けた。

- ・ 自分の勉強は楽しかった。
- ・ この学習目標はほんとうにいいれんしゅうになりました。私はこの学習目標をする前に ずっと小説を読もうかなってまよっていたので。このじゅぎょうのおかげで、読むことになりました。もし学習目標が行われなかったら、私は小説を読まないままです。これからも小説を読んでいきたいと思います。
- ・ みんなの発表全部いいだと思いましたが、特に～さんの目標の発表がよかったと思います。日常生活日本語は本当に外国人に必要だと思います。
- ・ Kポップだけの言葉の使い方もあることに気づきました。
- ・ やはり目標が先にあって動けますよね。一番重要なのは日本語に興味を持っていることじゃありませんか。興味があったら、どんな方法でもきつうまくいけます。

学習者はこの取り組みを「自分の勉強」と捉えたり、小説を読むきっかけとして活用したりしていた。また、「Kポップだけの言葉の使い方がある」ことや「日常生活日本語」が「外国人に必要」であることにも気づきを述べている。

課題遂行型学習では、学習者自身が目標設定し、適宜変更・修正を加えながら、具体的な計画や活動を行った。授業では、経過報告や振り返りを繰り返し行っただが、この振り返りについて意義を感じているコメントが見られる。

- ・ 一緒に意見を話しながら授業を受けた点が良かったと思う。
- ・ 自分の目標をよくふりかえるのがいいと思う。
- ・ 言語を勉強することはなかなか難しい。ちゃんと努力するしかないと思う。目標を立てて何かしたほうがいいとはっきり分かる。そして、ふりかえることも自分がたりないことが分かる。たりない物を確認する。

課題遂行型学習に対する学習者の評価は、目標設定、活動、振り返りを含めて概ね好意的であった。学習者1人1人が自身にとって興味がある内容を選ぶため、学習の動機づけの強化やモチベーションの維持につながっていると思われる。しかし、目標達成までの道筋が不明瞭な学習者もいた。これらを明確化するためのデザインは今後の課題である。

#### 4.3 発表およびポートフォリオについて

発表では、学期を通した自身の学習を振り返り、その内容についての具体的な説明およびコメ

ントをしてもらった。その気づきには「学習方法の変化」「学習の成果」「自分に合った学習方法」「設定した目標との距離」「学習に関わる他者の存在」などの要素が見られた。

- ・漢字クイズの覚え方が変わりました。最初は読みだけでしたが、ことばを覚えなければならぬことがわかりました。【学習方法の変化】
- ・漢字のクイズでだんだん上手になりました。【学習の成果】
- ・たくさんの漢字と漢字の言葉のしゅるいに明るくなりました。【学習の成果】
- ・自分が言葉を覚える方法は画像(アニメやドラマなど)と繋がっていると思う。【自分に合った学習方法】
- ・自然な日本語を話せることは最初は簡単だと思ったが、なかなか難しく大きな目標になった。【設定した目標との距離】
- ・皆はずごく努力していて、私も負けるな頑張れ！【学習に関わる他者の存在】
- ・自分で試してみた方法を皆さんと話しました。私が発表した方法を利用する人がいます。逆に皆さんから聞いた方法の中で選んで自分で勉強することに利用したいと思います。【自分に合った学習方法】【学習に関わる他者の存在】

今回の取り組みの中で、数名の学習者は学期途中で目標の変更や修正を行った。コース開始時には、「クイズでいい点をとること」だけを目標としていたが、コース途中で「相手によって言葉の使い分けができるようになる」という目標をより生活に即したものに変更したり、漢字クイズを行う中で「書き」よりも「読み」の方が生活で必要だと気づき、「書けるようになりたい」から「読めるようになりたい」と変えたりしている。前者の学習者は最終発表で、はじめの「クイズでいい点をとること」という目標に即して漢字学習とクイズの結果についても触れていたが、目標変更のきっかけについて、実際に旅行に行き知り合った日本人とのやりとりやホストファミリーとの会話と大学生との会話との違いに気づいたことなどと紹介していた。この取り組みをきっかけとし、留學生活における自分のニーズを意識化していった過程がうかがえる。

また、最終発表後、質疑応答の時間を設けたが、「これからも続けますか」「国に帰ってからどうしますか」といった今後の学習計画についての質問がクラスメイトから複数回された。これは学習が継続的なものであるという意識の表れであると考えられる。

一方、ポートフォリオ作成については課題が残る。次のようなコメントがある。

- ・漢字・語彙を増やした証拠が少ない。繰り返した証拠もなかった。

漢字学習の振り返りシート、学習計画・振り返りシート、最終発表で述べた学習の取り組み、学期全体の自己評価シートなどを見ると、それぞれの学習者が一定の成果を感じているように思われる。しかし、それらを手ごたえと比較するとポートフォリオは充実しているとは言いにくい。学習者自身の振り返りのため、そして教師など他者との共有のために、より有効活用できるよう

に再検討する必要がある。

## 5. まとめと今後の課題

以上のように、本稿では中級の漢字・語彙クラスで行った新しい取り組みについて述べた。まず、多様な背景やニーズを持つ学習者が在籍する別科の現状を概観し、別科日本語コースの見直しにおいて初級から中級へのスムーズな移行のために、中級の漢字・語彙クラスを設けた経緯を述べた。その上で、限られた時間で多様な学習者に対応するためには、授業外の活動も含めた「自律学習」の要素を取り込んだクラスデザインが望ましいと述べた（第2章）。本実践では、1) コースの目標として設定した1週40字以上の漢字・語彙を身につける。2) 学習者それぞれの興味やニーズに沿って漢字・語彙知識を増やす。3) コース修了後も継続して日本語学習が進められるように、自律学習能力を高める。という3つを目的とし、次の2つの活動を取り入れた。1つは、コースとしての基準を満たした上で、学習の管理を学習者自身が行うという自律的な要素を含んだ「漢字学習」である。もう1つは、学習者自身が漢字・語彙のニーズを意識化し、必要な漢字・語彙を自律的に学習していく「課題遂行型学習」である。さらに、学習プロセスの意識化および可視化のためにポートフォリオ作成も行った（第3章）。その結果、今回の取り組みにおける「漢字学習」について、授業時間外に自分に合う学習方法を模索したり、授業時間にクラスメイトと学習ストラテジーなどの情報を共有したりすることが学習者自身の新たな気づきにつながるということが分かった。また、漢字クイズが漢字学習の動機づけ強化や学習方法の意識化に肯定的な影響を与えることが学習記録やコメントから示唆された。「課題遂行型学習」については、学習者自身の興味やニーズに沿う活動ができるという点で、学習の動機づけ強化やモチベーション維持に効果があり、楽しいと評価する学習者が多かった。（第4章）。このような「漢字学習」と「課題遂行型学習」を併用したクラスデザインは、自律的な学習が要求される中級の漢字・語彙学習に有効であると考えられる。また、1つのクラスの中で「漢字学習」と「課題遂行型学習」の2つを組み合わせることにより、コースの到達目標と学習者のニーズの両方を満たすことができたと思われる。本章（第5章）では、今後の課題について「漢字・語彙学習の支援」「自律学習の拡充」という観点から述べる。

まず、今後どのように漢字・語彙学習を支援していくかについて述べる。今回の取り組みの大きな課題としてポートフォリオの整備・充実という点がある。「漢字学習」「課題遂行型学習」は概ね好意的な評価を受け、学習者も自身の成長を実感したことが学習記録や自己評価シートから読み取れる。しかし、ポートフォリオの特性である学習の過程を示す根拠は今回十分示されているとは言にくい。今後は目標達成の道筋を明確にする方法を検討する必要がある。また、最終発表で、学習者が集めた写真を紹介した学習者もいたが、写真や音声ファイルなどのデータをどのようにポートフォリオに取り入れるかも検討していく必要がある。

さらに、4.1節で触れたように、漢字クイズの1週あたり40字刻み（40字あるいは80字）という目安について再検討する必要がある。負担が大きそうな学習者に対しては学期途中で、40字



は目安なので減らしてもいいと声をかけたが、減らすという決断はしなかった。この学習者以外からも「60字のクイズがあるといい」という意見があった。クイズは開始箇所および進度が学習者によって異なるため、それぞれの学習者に合わせたクイズの準備が必要である。担当教員の負担も考慮すると、20字刻みのクイズが現実的であると思われる。この点も含めて柔軟なクラス運営を目指したい。

最後に、別科の日本語コース全体にポートフォリオを取り入れることについて述べる。今回、中級の漢字・語彙クラスにおいて自律学習の要素を取り入れ、一定の効果が得られた。この取り組みの範囲を広げ、留学中の「学習者の成長」を可視化するツールとしてポートフォリオを活用することが期待される。

## 参考文献

- 梅田康子（2005）「学習者の自律性を重視した日本語教育コースにおける教師の役割—学部留学生に対する自律学習コース展開の可能性を探る—」『言語と文化』12, pp. 59-77
- 蔭山峰子（2010）「ポートフォリオの要素を取り入れた自律学習の実践」『同志社大学日本語・日本文化研究』8, pp. 75-88
- 國澤里美・近藤行人（2016）「交換留学生を主体とした初級日本語クラスのコースデザイン」『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』27-2, pp. 123-137
- 国際交流基金（2010）『JF日本語教育スタンダード2010利用者ガイドブック第2版』  
[https://jfstandard.jp/pdf/jfs2010ug\\_all.pdf](https://jfstandard.jp/pdf/jfs2010ug_all.pdf)（2016年12月13日）
- 田中望・斎藤里美（1993）『日本語教育の理論と実際—学習支援システムの開発—』大修館書店
- 徳弘康代（2014）『日本語学習のためのよく使う順漢字2200』三省堂
- 横溝紳一郎（2000）「ポートフォリオ評価と日本語教育」『日本語教育』107, pp. 105-114